［公開講座　干支を語る：寅　講演録２］二〇一〇年二月二十日講演実施

「トラ」と呼ばれた男たち
―「男はつらいよ」への水脈を個人的記憶から探る―

三木　紀人

今年の公開講座について研究センターのメンバーと話し合ったときに、来年は寅年だから、「トラ」に因んだ話はどうだろうかという提案がありました。たいして議論もせずにいきなり意見が一致しまして、「トラ」というキーワードでそれぞれの専門と結びつけたお話をしようではないかということになりました。その結果として今回のタイトルが「干支を語る：寅」となっておりますが、私としては干支に関してというより、今年の干支である「トラ」についてのお話をするという心づもりで参りました。その前提で私の関心を持っていることに関して、あちらこちらに話題を及ぼしていきたいと思いますのでご了解頂けると幸いです。

先ほど申しました話し合いのときに、他の三人の若手がそれぞれ自分の得意分野のテーマを話すと思いましたので、私もそれに対抗して、中世文学で何かをと思ったのですけれども、四回目の担当の岡田さんが中世の専門家なので、中世は彼女に任せ、私は、自由な立場でと思って、とっさにその場で「寅さん」という名前を思い浮べ、「男はつらいよ」を取り上げようかという気になりました。といっても、それについて学問的に取り上げるのは難しいので、それが私の記憶の中にどう残っているか、昭和から平成にかけての長い歳月の中で、この映画を通してどんな経験を回想してきたかというようなお話をしようかなと思いました。毎回お見えになる方々をお見受けすると、同世代の方が中心であるような気がしていたものですから、その話題のなかに、若干共感を持っていただける部分があるのではないかというようなほのかな期待もありますが、果たしてどうでしょうか。

さて、今日のテーマに沿っていろいろ思い巡らしてみると、ちょっと私として残念な記憶になっておりますのは、寅さんの映画に心を惹かれたのがそんなに早くなかったことです。しかし、名立たる寅さんファンに、同様の例は少なくないらしいので、あまり拘らずにお話を進めます。

よく知られているように、「男はつらいよ」は、元々テレビドラマとして始まったのですが、その最終回が昭和四十四年三月、映画の上映が始まったのは同じ年の八月です。私はぼんやりしていまして、そういうドラマや映画があるのを知ってはいましたが、食わず嫌いで、見ようと思ったことはありませんでした。が、その数年後、もう「男はつらいよ」が軌道に乗って、大入り満員が続いたので、松竹は当分これを続けていこうということが決定した時期だったと思いますが、私がある女子大で持っていたゼミで、一人一人の学生が自己紹介を始めた中で、一人が、「私は生まれも育ちも葛飾柴又で」と言いました。それが教室の中で非常に受けまして、二十人ぐらいいた女子学生の中のほとんどが笑ったのですね。すぐ笑えなかったのが数人いて、実は私もその一人だったのです。なんだか妙にそれが屈辱的でもあり、寂しいような妙な気分になっ

て、一生懸命、みんなが笑っているのだから、笑わなくちゃまずいかなと思って、遅ればせの作り笑いでその場を取り繕いました。授業終了後に、笑った一人に、「あれで、みんなはどうして笑ったの」とその自己紹介について聞いたら、「男はつらいよ」という映画の決まり文句をもじった自己紹介だったので、みんなが笑ったと教えてくれました。非常に赤面しましてね、そういう情報に疎い自分はなんて時代遅れなんだろうと反省しました。そして後に、テレビで放映されたこの映画を目の当たりにして、あらためてまた色々と納得しました。

こうした初期の出遅れの埋め合わせをするために、その後、まめにこの映画に向き合い、しばらくは家族を巻き込みさえして、一家総出で映画館に駆けつけ、封切り初日にみんなで大いに興奮しながら映画を楽しんで、というような日々もありました。その習慣が消えてからは、一人で行くようになったり、誰かを誘って行ったり、あるいは映画館に行く時間がなかなか取れなくなってからは、もっぱらテレビで見るようになっていって、ファンクラブに入ったりして全四十八作はすべて見たものの、結局のところでは、私は大した寅さんのファンにはなりきれず、国民の平均よりはちょっとましかなと言う程度です。従って、今日こんなところで、偉そうな話は出来ませんので、映画そのものに即してうんちくを傾けるとい方向ではなく、むしろ周辺的な事実への個人的思いの一端を取り上げます。

よく言われることがありますが、なんだか妙に寅さんって懐かしい存在ですね。彼は、人柄も生き方に於いても問題の多い人物で、彼を規範として仰ぐ人はかなり限られると思いますが、妙に懐かしく、忘れられない何かがありそうです。そのいわれはどこにあるかを考える上で、「トラ」という言葉が重要ではないかと私は思っております。これを名、または名の一部に持つ人は、その事だけでちょっと他と違った印象を与え、それで人の心に残るのではないか、少なくも私一個にとってはそうらしいと思いつつ、いろいろ振り返ってみると枚挙にいとまのないほどに事例が浮かび上がってきます。十二支の他の動物にちなむ名前にはこういうことがないのではないでしょうか。

「トラ」について思いめぐらしている内に、私の記憶の中に浮かんできたもっとも古い例は、私にとっては「大中寅二」という名前です。「椰子の実」という歌の作曲をした人として、たぶんどなたもご存知と思います。それ以外の事績についてはあまり一般的には知られていませんが、一生を教会のピアノ奏者として終始した方のようです。甥に当る阪田寛夫さん、芥川賞作家であり、「サッチャン」を代表作とする童謡の作詞者でもあったあの方が、寅二について回想された文章に、寅二は、師と仰いだ山田耕筰から常々「寅ちゃん」と呼ばれていたとあります。阪田さんの『どれみそら　書いて創って歌って聴いて』という一九九五年刊の本で読んだものですが、それによると、寅二は名利を求めない愛すべき個性の持ち主で「男はつらいよ」の主人公と一脈通じるところがありそうだと、私は一人合点で想像しております。

さて、その「寅ちゃん」が曲を付けた「椰子の実」は、「名も知らぬ遠き島より」と、未知の世界への空想を誘うフレーズで始まります。国民歌謡の一つとし歌われ、それがＮＨＫのラジオ放送で毎日聞こえていた時代がありました。確認してみると、昭和十一年にそれが初めて放送されたようです。私にとって十一年はまだ生まれて間もない頃です。た

ぶんこの年の好評によって、また、この名曲を継ぐ作品がなかなか生まれないので、おりおりこの名曲を再利用するような時間があったのではないかと思います。私の記憶に残っているので、昭和十三年、十四年頃ではないかと思いますけども、「椰子の実」という歌を折り折り聞きながら、神妙な気分になり、その頃「人生」なんて言葉を私はまだ知らないわけですけども、後で考えれば、「世界」とか、「人生」とか、そう言ったものについて、幼い心の中で、この歌に刺激されながら学習を始めた時期であったのではないか。そんな気がいたします。

われわれは、誰でもそうでしょうけれども、幼児期には、いわゆる親の目が届く範囲とか、親の声が聞こえる所とか、それが世界そのものであって、その外に、自分の居場所、ないし、自分の関わるべき世界があるとは誰も思っていません。それをだんだん知っていくのが、成長とか、発達ということになると思いますが、そういうことが、遅かれ早かれいずれ必要になる。今ここにいる自分が目の当たりにしているところだけが世界のすべてではないということを、幼心におのずと知っていくのが普通ですが、この歌はそうした成長を促してくれたように思います。「名も知らぬ遠き島より、流れくる椰子の実、故郷の岸を離れて、汝はそも波に幾月」云々。子供には未知の言葉がたくさん出てくるのですけども、それなりに理解のできないこともないような気になった私にとって、「遠い」とか「流離」「帰る」「故郷」「涙」などの語が心に響いてきて、生きていくことに思いをいたしてしんみりとなり、内省的な気分に誘われたものです。昭和十年代前半、相次ぐ戦勝情報で国中が高揚しがちな時代の子として、暗い子供だったと自認しないわけにいきません。親がそれに気づいていたかどうか、文句を言われた記憶は特にないのですが。

「椰子の実」の方に戻ります。歌の始まる前に、アナウンサーが作詞者と作曲家を紹介するのですが、前者の島崎藤村よりも、後者の大中寅二の名がまず印象に残ったことを申し添えておきます。熱烈な藤村の崇拝者だった先生から、小学校高学年で国語を教えていただき、後々のために貴重な成長期を送り、その中で藤村の偉大さを知りましたが、まったく無知だった幼少期の自分が「椰子の実」をめぐって藤村より寅二に惹かれたことを先生に対して申し訳なく思ったりしたもので、これも懐かしい思い出です。惹かれたのは、「トラ」という記号に並々ならぬインパクトがあるためでしょうか。とにかく私にとってはそう思う他ありません。しかし、果たしてそれだけかと言えば、そうではない気もいたします。

ここで、阪田さんの本にもう少し立ち止まって、大中寅二という人物に触れておきますと、この方はなかなかの個性派だったようです。子供の頃には、なんとなくクラスメートから笑い者にされたり、いじめられたりする、つまり、なかなかみんなと一緒に標準的な生き方ができない、ちょっと不思議なキャラクターだったらしいですね。その彼がねじれずに育って行って、広く日本人の心をつかむ歌の作曲をするに至るまでを阪田さんは目の当たりにしていったわけです。氏によると、寅二は元来教会の厄介者だった。そこで行われる日曜学校の世界が、いじめを受けていた尋常小学校の世界に比べて、かなり自由で緩やかで居心地がよかったので、その感覚に乗じて参入した寅二は、日曜学校の静かな雰囲気を常に乱す子だった。それに悩んだ教会側の人々が何とか彼を静かにさせなくてはならないということになっていたのに協力して、阪田さん

のお母さんが、ピアノを担当させるようはからって寅二に指示を出したのです。本日配布した一枚目の資料の中にそれに触れる部分が貼り込んであります。「寅ちゃん、やってみない？」というふうに、何気なく彼に声をかけて、一つの役割を与えたことによって、彼の人生が開けていくこととなりました。そのはるかなる到達点が「椰子の実」の作曲として、全国的に彼の名前が毎日全国に聞こえているという事実でした。阪田家の人々は、親しくそれまでのいきさつを知っていたので、日本中の人々がいま「寅ちゃん」の名前を知ってくださっているのだ、あれほど皆が迷惑をかけられた困り者の男の子が国民周知の名前になったのかと不思議な気持ちになったそうです。

それを回想する阪田さんのほうも、その頃の童心を終生持ち続けて、小説家、詩人として活躍を続けました。芥川賞を取られ、もう一方では、誰でも知っている有名な「サッちゃん」という歌を作ることになるのですね。幼馴染の「サッちゃん」が遠くに行ってしまった時の喪失感を歌ったあの作品です。人が生きる上で絶えず自覚せざるを得ない「寂しさ」の初体験かと思われる世界を扱って、深く心に残る歌です。この歌の男の子の喪失体験は、いわゆるマドンナたちに振られ、去られてばかりいる車寅次郎の原型的世界のようでもありますが、偶然の類縁でしょうか。それはさておくとして、「サッチャン」がメロディに乗って家庭の中でも、幼稚園、小学校の教育の現場でも歌われて日本人の精神形成に寄与しているのを思うにつけて、同じ役割を果たしている「椰子の実」と「男はつらいよ」を一括りで今日お話ししているのは、まんざら牽強付会ではないように思います。しかし。「椰子の実」についていつまでもお話ししていると、いつになったら「男はつらいよ」に到達するのか分かりませんので、この歌についてはこの辺で切り上げようと思いますが、最後にもう一言だけ申し添えます。

というのは、お気づきの方もいらっしゃるでしょうが、寅さん映画の中には「椰子の実」のテーマや用語と重なるものがたくさん出て来ることについて触れないわけにいかないからです。それこそが、この映画の根源的魅力であり、国民を広く感動に誘い込んでいく要素だったと思います。懐かしい世界が遠くにあり、しかし、そこにずっと定住できずに、生きるために、働くために、主人公はあちらこちらを移動しながら生きている。そして、時々闇雲に懐かしい世界に帰って、しばらくぶりに信頼し合っている懐かしい血族の一人一人と出会う。出会って喧嘩したり、楽しい時間を一緒に送ったり、あるいは別れて、そういうものの繰り返しがこの映画を通し四十八回繰り返されていくわけですけども、それの背景に、作者の側にも、それから、それを見て興奮したり、感動したりした人々にも「椰子の実」に歌い込まれた世界についての格別の心の寄せ方があり、それが映画の人気と深く関係しているんじゃないか。ということを大中寅二という名前から連想させられました。

その次に、「トラ」という名で思い出されるのは、講談社の絵本という子供の読み物です。これが刊行されるたびに親から買ってもらって、全巻通読していた時期がありまして、その中で加藤清正の一冊があり、その中に虎退治の絵があったのを思い出します。いわゆる朝鮮征伐のもっとも輝かしい風景で、これを見ると、とても痛快な気分にひたったものです。この出兵は、秀吉の取り組んだ戦争としてもっとも乱暴で愚かなものであり、正当性に乏しい上にはかばかしい成果がないものだっ

たことは、昭和十年代の日本の子供もかなりはっきりと感じていたような気がしますが、にもかかわらず、というより、それゆえに清正の虎退治の絵が受けたのだと思います。数年続いたあの戦争について喚起力を持つ絵柄が他にあったかどうか、にわかに思い出せない。それほどに、清正と虎の絵は圧倒的でした。

この加藤清正の虎退治が、前回の欒さんのお話の配布資料に中に載っているから、話題になったのでしょうか。扱われなかったでしょうか。うっかり確かめずにここに立ってしまいました。ことによると重複するかもしれませんが、お許し下さい。

とにかく、加藤清正というと、打てば響くように虎退治というふうな理解がされていた時代があって、現在でもそれが一般的な常識かもしれず、昨年立派に再建されました熊本城の本丸のどこかの部屋に、その場面を描いた絵が飾られているのを、テレビを通して見ました。その有名な虎退治を理解するために必要な知識は、朝鮮文化に於ける虎の重要性ですね。朝鮮文化、あるいは朝鮮の歴史を語る上で、虎という動物はもっとも神聖で強力なもので、何時間かけてもここでお話しできないほど多彩な話題が古今にわたって存在してきました。その特別視された虎を退治したと語られているのですから、その意義は計り知れないほどのものだったことになりますが、絵本を読んでいた時の私は素朴で無知でしたから、そこまでの理解は出来なかったと思います。ただ、そのときに、非常に気になったのは、絵本の中に紹介されていた事実ですが、加藤清正は幼名が虎之助なのですね。自分の幼い頃の名前にあった動物を後々武将として殺したときに、何か特別な心の痛みが無かっただろうか、ということを、絵本を読みながら感じたり、清正同様にあこがれた上杉謙信が、俗名で輝虎だったこと、戦国武将などで名に「虎」の文字を持つものが多いことを連想したりして、彼らもチャンスがあれば、虎に対して攻撃をし掛けたただろうかととりとめないことを幼心で思ったものです。そのことから、遅かれ早かれ自己に向き合って、必要に応じてこれを超克せねばならない男の人生のつらさに思いをいたせば、それこそ、「男はつらいよ」を支える哲学に通う世界への縁が見えてきたかもしれないのですが、もちろん、そんな方向に思いは向かわず、ひたすら、清正の強さ、勇敢さに驚嘆するばかりでした。

そういえば、これが事実であるとして、清正はどうやって虎を仕留めたのでしょうか。そんなことも気になりました。講談社の絵本では、たしか槍を手にした姿になっていたので、それで殺したのだろうと単純に思い込んでおりましたが、虎は敏捷きわまりなく、強靭ですから、槍で殺すというのは大変なことで、すごいなと思って感心する一方で、鉄砲を使ったとする文献があるようだと後で聞いて、やっぱりそうだったかとがっかりしたりしている内にこの話題から遠ざかっていきました。

「トラ」で思い出す名前をもうちょっと並べておくと、時代が下って一番強烈な一人が、吉田寅次郎ですね。吉田松陰という名前であまりにも有名な歴史上の人物ですが、彼は、寅次郎と名乗っており、きっとこれが「男はつらいよ」の寅次郎の名前の由来なのだということを述べた人がいて、今日の資料三枚目の中にその方の文章を紹介しておきました。東大名誉教授の延広真治氏の「寅さんはなぜ寅次郎か」です。車寅次郎の命名をめぐる諸説を承けた新しい提案として、吉田寅次郎説を出し、博引傍証を展開されています。論自体は短いので、全文を資料に貼り込んでおきましたのでお読み下さい。博学無類で知られる方のお書き

になったものだけに、新聞所載のエッセイとして大変密度の濃い、驚くべき文章です。この方は大学の後輩で人柄についても多少承知しているのですが、真顔でとんでもない冗談を言って人をひっかけ、笑いを誘うことも多かったように記憶していますので、どこまで真に受けていいのか、若干心配です。元々、この方の専門は話芸で、落語・小話の歴史についての第一人者です。その提案ですから、受け入れるにはそれなりの手続きが必要かもしれないと思いながらも、かなり重く受け止めてきました。皆さんもぜひ熟読していただきたいと願っておきます。

私としましては、この文章で延広さんが触れていないことについてこの場で一つだけ申し上げておくとすれば、松陰の辞世についてです。安政の大獄で彼が処刑されるに際して詠んだ歌

身はたとひ**武蔵の野辺**に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

この歌は太平洋戦争の頃、愛国百人一首の一首としてもてはやされたもので、やはり私の小学生低学年時代の記憶の中に鮮やかに残っています。その歌に出る武蔵野は、都の人の見知らぬ、しかし、心を誘う野として空想を誘って数々の名歌を生んできました。武蔵野に代表されるような荒涼として人跡まれな広大な野を言う「虎伏す野辺」という表現もあり、もし吉田松陰の歌にそれへの連想がはたらいているとすれば、彼は死後、武蔵野に伏す虎となり、それこそ虎視眈眈と江戸ないし日本の動向を監視し続けたいという意思表示を読み取っておきたい気もしますが、果たしてどんなものでしょうか。考え過ぎかもしれません。

さて、この辺でだんだん寅次郎に近づいていますけれども、延広さんの文章の中に、いろいろ寅次郎のイメージのもとになった、名前だけじゃなくて、キャラクターとか、面影とか、そういった面で、もとになったようなものがなんだったろうかということが、いくつか書いてありますし、ほかの同じような試みをした方も沢山いらっしゃいますが、どなたも一人もおっしゃっていない原型的人間像を一つ、今日は提案してみたいと思います。

「狐の呉れた赤ん坊」という映画はご存知でしょうか。これに先立って同じ俳優主演の「無法松の一生」という映画が、おりおり上映されたり、テレビにかかったり、あるいは車寅次郎と結びつけて論じられたりすることが多いのに、そのあとに作られ、戦後最初の時代劇として上映されました「狐の呉れた赤ん坊」というのは、あまり話題になるのを聞いたことがないんですけども、どうなのでしょうか。勝新太郎主演でリメイクされたことがある映画なので、それなりに知られている気もいたしますが。ちょっと、会場の皆さんにお尋ねしたいのですが、この映画、もちろん、元の方をご覧になった方がいらっしゃいますか。おありでしたら、挙手をお願いします。（一名も手が挙がらず。）

この映画は昭和二十一年の封切りですから、戦争が終わった直後に作られたはずなんですね。その頃は占領軍の厳しい指示で、時代劇は原則的に禁止に近く、仮に作った場合にも、そこで殺人が行われてはいけないとか、武器が利用されてはいけないとか、封建思想を肯定的にあつかってはいけないとか、そういう制限がありまして、もっぱらそれまで時代劇の中心だった「ちゃんばら」と呼ばれたものが映画館にかからなくなって、人情物のような映画が細々と作られた時代がしばらく続きま

した。まもなく何年か経つと、それが緩んで、戦前のような勇ましいちゃんばら映画が復活しましたが、その前の、一番進駐軍の命令が厳しかった時代に、その命令の網の目をくぐって戦後最初に作られた時代劇がこの映画なんですね。私の記憶では、飽きもせず何回も行きましたが、常に大入り満員でした。残念ながらここにいらっしゃる方は一人もその中に含まれていないようですが。

今日ちょっとだけ、それを映像でご紹介しようと思います。

テレビでやっておりましたのを録画したもので、あまり画質はよくないのですが、元々映画そのものも終戦直後で不鮮明だったのだから、いたしかたありません。しかし、主人公が「男はつらいよ」のそれと似ていることは実感していただけるのではと、期待しております。彼は東海道の大井川の川越人足、名前は「張子の寅八」と言います。演じたのは戦前の時代劇のもっとも代表的スターの一人だった阪東妻三郎、略して阪妻と呼ばれ、一世を風靡した人で、私もとてもあこがれておりました。この人の息子が三人いて、皆俳優です。この間亡くなった田村高廣さんをはじめとする三兄弟として知られております。その他、「狐の呉れた赤ん坊」をめぐる情報についてはお手元の資料をご参照していただくこととして、上映に移ります。五分前後だけ見て頂きます。

（「狐の呉れた赤ん坊」鑑賞）

まもなく捨て子が拾われる場面になります。虎八は、その子について狐が呉れた赤ん坊だというふうに一人決めをして、自分の手で一生懸命育て、それがかけがえのない生きがいになっていく、という展開です。ところが、赤ん坊が実はある大名のご落胤であると後に判明し、さらにその大名家で世継ぎが急死したため、その代りのしかるべき子供を見つける必要が生じて、ついに、虎八が育てた子が大名家のお世継ぎとしてもらわれていくことになります。その別れのときに、川越人足として虎八が、その男の子を肩車で運んでいくというのがラストシーンで、そのときの別離の悲しみに、満員のお客がみんなもらい泣きしながら見たものです。戦中戦後の中で、誰もが親しい人との離別をいくつも体験していましたから、身につまされたのだろうと思います。私もその例外でなかったことは、言うまでもありません。小学生としてあの映画を見た私は、その後何度見ても同じ場面で涙が出るのです。一時間二十八分の映画で比較的短かったことも手伝って、あれを同じ日に三回見た日もありました。何分ひまだったので、仲間と一緒に同じところで泣いたものです。そうした情景が国内全体で展開していたのではないでしょうか。その記憶を思い起こすにつけてこの虎八と寅次郎が無関係とはとても思えません。「男はつらいよ」の引き合いによく出される、同じ阪東妻三郎主演の「無法松の一生」とともに、これについても比較検討が行われてよいと思います。純情でシャイな主人公の荒々しさと達者な憎まれ口、美女へのほのかな思い、決別によるフィナーレ、その他、「トラ」を名に共有すること以外に重なる点は色々ありそうです。あるテレビ番組のインタビューで山田洋次監督が、寅次郎のモデルを問われて回答で「張子の虎という言葉もありますからね」と答えておられますが、それは「狐の呉れた赤ん坊」を念頭に置いての言か、そうであってほしいと思ったりしました。

ただし、こうした詮索をする上で、質問の対象とすべきは山田監督が

もちろん最適として、それ以外にもおられるのではという気がしないこともないです。というのは、映画に先立つテレビドラマのクレジットタイトルに「企画」として小林俊一さんという名前が見えるからです。この方はドラマのディレクターであり、映画「男はつらいよ」の第二作三作の脚本を担当、第四作の監督をなさっていて、制作の核心部分におられたようですから、その「企画」は当然人物造形にも反映しているはずと想像されます。そうすると、ドラマを視野に入れないわけにいきませんが、結構これが難しいのです。このドラマがほとんど現存していないためですが、一部残っているのでそのまたごく一部をご覧いただきましょうか。

テレビドラマの「男はつらいよ」の現存するのは第一回目と最終回だけがフジテレビの倉庫で眠っていて、それが平成八年の渥美清追悼番組の中で紹介されたのをご覧いただきます。後々の「男はつらいよ」の寅次郎とは相当違うということがただちにお分かりになる。あえて言えば、そもそもはかなり疎ましく、とんでもない男であったのです。どのぐらいとんでもないかということを見ていただきながら、それが国民的ヒーローになっていく不思議さに改めて思いをいたしたいと思います。ドラマの第一回の最初の四、五分だけご紹介します。

（ドラマ第一回冒頭鑑賞）

テレビドラマと映画とが、相当違うということはどなたもおわかりでしょう。いきなり最初に新幹線に乗ってやってきますよね。映画の寅次郎が用いた乗り物とはかなり対照的です。では、操業開始から数年後の先端的乗り物と言える新幹線のどこから彼が現れるかというと、トイレの個室の中からでしたね。登場した彼は、かばんの中から洗面用具を取り出して、トイレの洗面所で、ほかの人への迷惑も顧みず、念入りに朝の洗面を始める。そしてまもなく彼はさくらと車内で遭遇し、さくらからとても不快な表情で振り返られる。しばらくぶりの兄妹の再会なのに、本人同士はまだそれを知らず、さくらにとって寅次郎は二度とかかわりたくない変な男として記憶にとどめたはずです。ドラマの展開の中でその関係がだんだんほぐれていったはずですが、それがどんなりゆきだったのか、当時これを見ていなかった私には解りませんし、フィルムないしテープが保存されていない現在、台本が残っていればそれを見て確かめる他ないのですが、当面そこまで調査している余裕がなく、今日は不明として扱っておくしかありません。第一回同様に辛うじて現存、テレビで公開された最終回では、人柄も対人関係に於いても別人のようにになって消えていくのですけども、おっちょこちょいな所は相変わらずで、それが災いして彼はとても悲惨な死に方をするのですね。具体的には、奄美大島にハブを退治に行って、ハブに噛まれて死ぬ。寅次郎がハブと対決するというのは、「竜虎相搏つ」とか「竜攘虎搏」という言い慣わしをふまえたものだと思います。きわめて強力な二者が争って決着が付きにくいことの形容ですが、ドラマの「虎＝寅次郎」は「竜＝はぶ」にあっけなく殺されてしまったわけです。相手のはぶが画面に登場せず、寅次郎の苦悶と死のさまのみが仰々しく演じられるのがおかしみを誘いますが、そう感じるのは、その後、ドラマの枠組みを超えて彼が目覚ましく再生して長く生き続けていくことをこちらが承知しているからです。そんなことを知らずにいた当時の熱狂的ファンにとって

は、寅次郎の死はとうていうけいれられないものだったようです。

最終回放映日から「寅を何で殺した」というような脅迫めいた言葉が全国津々浦々からテレビ局の電話に集まって来たそうですね。しかもその電話をかけてきた相手は、普段テレビ局が視聴者として対応したことがないような荒々しい、しかし、真情あふれる人々、つまり、人柄も社会的立場もドラマの「寅」と似ているタイプのようだった。その人々が自分たちのヒーローである「寅」をどうして勝手にテレビ局の都合で殺したのか。けしからん。そういう非難囂々を聞き、関係者たちは聞き流しに出来ず、映画に取り上げて彼らの不満をなだめ、営業的にも期待がそれなりに持てるかもしれないということになって、とりあえず一つだけ作ってみようと思った結果、映画が思いがけないヒットしたので、二つ目、三つ目、四つ目になって、ついに四十八まで行くという歴史が始まっていきます。どう考えても、今の展開を見ている限りでは、好ましい国民的英雄になりそうな要素が寅さんにはほとんどなかったと思うのですけど、どうでしょうか。私が仮にこのドラマにチャンネルを合わせたとしたなら、見始めて間もなく、消してしまったと思いますね。洗面所で歯を磨き始めたあたりから、もうちょっと自分としては付き合いきれないという感じになると思ったはずです。それがどうして私を含めた多くの国民にとってあんなに懐かしい男になっていくのか、実に不思議なことです。私が経験したような忌避から感動への逆転は、多くの人の記憶に残っていると思います。例えば、私の一番印象深い一つは、「世界の」という冠がもっともよく似合う、指揮者の小澤征爾さんのケースです。映画『男はつらいよ』の音楽を担当した作曲家の山本直純さんに誘われて、渋々見に行って、その結果、目が赤くなるほど涙を流したそうです。涙が出るほどおかしかったからではなく、この世の悲しみに触れた感動ゆえとのことです。さすがに大芸術家の感性は違うと、この映画に感動はするものの、それほどに泣いたことのない私としては、このエピソードを知ってまた感動したものです。小沢さんはそれ以来ずっとこの映画の魅力にとりつかれて、全作をもちろん見て、おりおりなにか機会があるたびに見直しておられるとのことです。いま重い病気にかかって療養中のようなので、病室でまたじっくりと、ご覧になっているかもしれませんね。

さて、いま見ていただいたドラマの放映が昭和四十三年、先ほどの張り子の寅八から二十何年間か経っておりますが、その間の「トラ」関係のあれこれの内、印象に残るいくつかにちょっと注目しておきたいと思います。寅さんをめぐる話題の中で取り上げられたことのあまりない事実だと思います。一つは、お手元の資料六に掲げました熊本虎三という名前です。これがいかなる人物であるか、ご存知の方がいらっしゃれば、手を挙げていただきたいんですけども。どなたもお挙げにならないようですね。

熊本虎三さんは、社会党右派の代議士でして、東京第六区選出の、昔はかなり知られた代議士だったと思います。知られたいわれは、業績や能力、ないし思想や生き方にというより、この名前が人々の人気のもとになっていたような気がします。なぜか「熊さん」ではなく、「虎さん」と呼ばれながら選挙のたびに、票を伸ばしたものです。例えば、昭和二十七年東京第六区の総選挙の得票数、これについては、現在とても世の中便利になったからインターネットで簡単に確認できます。第一位が社

会党右派、後に自民党に移った山口シヅエさんという方で、あの人は、ご記憶の方がいらっしゃるかもしれないですけど、とても魅力のある女性でしたね。若く歯切れの良い演説をする方で、今はそういう代議士が少なくないですけど、その頃には稀で、いわゆるマドンナ候補のはしりになったような印象です。圧倒的な人気で得票を伸ばして七万二千九百三十票。それに匹敵して熊本虎三は六万七百五十票取っている。社会党右派が二人並んで上位を占めたのですからこの選挙区は相当な異彩を放っていたと言えます。しかも、この選挙区の自民党候補には、後に大臣となった人が二、三人いることを併せ考えれば、同じ党の山口さんとトップを僅少差で競り合ったのは大したものです。熊本さんがそういう位置にいられた理由が、「虎さん」という名の徳に負う所大きいとすれば、やはり日本人は「トラ」という記号に惹かれてきたあかしと、言いたい気がしてなりません。残念ながら、この熊本さんは間もなく急死されたので、この人の名前とイメージがあっけなく人々から忘れられてしまい、少なくも全国的規模ではそうだったと思います。たまたま私はこのころ東京第六区の中に含まれる高校に通学していたものですから覚えているのですが、それだけではなく、クラスメイトに熊本君という人がいまして、彼への記憶と結びついているので、忘れていないのです。名前はぜんぜん虎とは関係なかったのですが、クラスメイトから、「熊さん」ではなく、同姓の代議士にちなんで虎さん虎さんと呼ばれていて、理由がそれだけではなかったかもしれませんが、とても人気者でした。クラスの役職だったか、生徒会の委員だったか忘れましたが、互選で決めた時に結構票を伸ばして、選出されたこともありました。本人にとって迷惑だったと思いますが。

この熊本虎三の話題が必ずしも「男はつらいよ」にとって無関係でない可能性を私に感じさせるのは、彼の選挙基盤が葛飾であるという事実です。これは偶然の関係なのだろうか、ことによったら山田洋次さんはそのことを記憶していて、あるいは記憶している誰かからの勧めで、葛飾柴又で生まれた男として車寅次郎を作ったのかという感じがするほどです。

次にご紹介したいのは、同じ時期の昭和二十七年、いまの総選挙のあった直後ですけども、その年に封切られた映画の中に「張子の虎三」というのが出てきます。資料二枚目の「狐の呉れた赤ん坊」の下に「次郎長三国志」、サブタイトル「次郎長売り出す」というのが載っていますのでご参照ください。これも非常にヒットしましてシリーズ物になっていきます。続々と清水の次郎長とその子分であった二十八人の代表的な子分たちの物語が取り上げられていきます。その最初のタイトルバックと最初の部分を、五分ぐらい時間をいただいてご一緒に見たいと思います。

（「次郎長三国志」鑑賞）

今見ていただいた範囲だけでも、「男はつらいよ」をご覧になった方なら色々ななつながりが発見できると思いますけど、いかがでしょうか。ずっと画面に出ていた人物が「虎」です。あの人は、なんとなく演技がぎこちなく浮いている感じなきにしもあらずという感じでしたが、やむを得ないことで、演じているのは本職の俳優ではなくて、広沢虎造さんといって、当時の日本最高の浪曲師です。浪花節のブームを作った

方で、この方も突然亡くなってそのブームが消えていったのですが、この辺の事にかなり山田洋次さんは関心を持っておられたのではないか。山田さんは落語がお好きだそうですが、ずいぶん浪花節も聞いていたということを何かの機会におっしゃっていたので、今見て頂いた「虎」と寅次郎が関係ないはずはないと思います。「男はつらいよ」と同様に、健気で賢く美しい女性が出てきます。お蝶さんといって、清水の次郎長の妻、ちょっとご覧になっただけでも、この人の魅力は際立っているのではないでしょうか。演じているのは、若山セツ子さんといって、昭和二十年代に活躍した人です。「銀嶺の果て」などで三船敏郎と共演した清純派の女優として知られていましたが、「銀嶺の果て」の監督をつとめた谷口千吉さんと結婚して、憧れていた我々をずいぶんがっかりさせたものです。間もなく離婚、その後は活躍が見えにくくなって、五十二歳の時だったと思いますが、自殺されたそうです。彼女の夫だった谷口さんの後添えが、今も美しく、健在の八千草薫さんで、この方を見るたびに、対照的存在だあった若山さんを思い出すのですが、私の同世代にはそういう男性が意外に多いと思います。

つい脱線気味になりましたが、そのついでに触れておくと、その八千草薫さんが「男はつらいよ」に出てきます。その役柄が、通常のマドンナとずいぶん違っていて、八千草さんの方が寅さんを口説くのです。かなり具体的にせまっていく場面があって、慎み深そうなあの八千草薫がこういう役をやるのか、さあ、寅はどうするのだろう、大喜びして受け入れるだろうか、いや、そんなはずはないのだが、などと思いながら見ていると、いつもと同じで、二人は結局結ばれません。そうなるに決まっていると知っているのに私はハラハラドキドキしながら見つつ、一方で、この映画そのものとは関係のない若山さんのことをひとりで勝手に思い出したりもしていたのです。この話題はこの辺にしておきます。

さて、肝心の「男はつらいよ」に行きつく前に、だんだん時間がせまってきましたけれども、もう少し別の方に目を向けておきます。昭和二十年代から四十年代にかけて、今日お話ししてきた、張り子の寅八、熊本虎三、廣澤虎造ないし張子の虎三、その他にも色々ありましょうが、その流れの傍らに忘れてはいけないのは、例の阪神タイガースです。どうしてかあの球団は虎を名乗っている。その名乗りゆえにあのチームは特別な人気があるのではないか。そんな気もしております。あのチームのファンを、通称で「トラキチ」と言っておりますね。「キチ」は昨今何気なく使いにくくなった言葉ですが、「トラキチ」は自他ともに認めている特別な用語のようです。タイガースファンの印象には、愛すべきクレージーな傾向が歴然としているからで、その傾向は、「トラ」の愛称で知られる人々と何か通い合うものがありそうです。「男はつらいよ」の歴史と、タイガースおよびそのファンの歴史とがもっとも劇的なかたちで並行しているのは、偶然の作用でしょうが、それぞれの人気を増幅していると思われ、双方の背景に、ある経営戦略が共有されているのではと、つい深読みをしたくなるほどです。

阪神タイガーズのあり方と寅次郎の生き方が似ている点は色々ありますが、その一つ。ややこじつけめいた話になりますが、お話ししておきます。

寅次郎の映画では、さっき申しましたように、一つ一つの作品にマドンナという言葉で括られている美女が出てきて、それと寅次郎はもうちょっとで結ばれそうになることもあるが、結局結ばれない。さっき触

れた八千草薫がマドンナになる第十作がその一例ですが、振られてばかりの寅次郎が、今度こそ結ばれそうになると、いつもと違い、かえって困って、なぜか、逃げ腰になります。阪神タイガーズのファンにもそういうところがあって、優勝を望みながら優勝しそうになると困ってしまう。達成の前の不思議な戸惑いを見せるのが阪神ファンの特色ではないかということが、私が付き合っている中の少なからぬ阪神ファンに共通する特徴で、これは、より一般化出来るように思っています。

昭和四十八年、「男はつらいよ」が完全に軌道に乗っていた時期に、あたかもそれと連動するかのように、ペナントレースでしばらくぶりに阪神に勢いがあって、優勝目前という時がありました。忘れもしませんけども、そのあと一つ勝てば優勝という日に、阪神巨人の試合が甲子園でたしか午後一時開始で行なわれて、いきなり一回の裏に阪神が七点取ったのです。当時勤めていた大学の大きな部屋で皆さんと中継を見ていた私は、阪神が七点取ったところで、授業が始まるのでテレビの前を離れて、教室に向かいました。もちろん、その時は阪神の優勝を確信して、私は別にファンではないのですが、何となくほっとして、一緒に見ていた阪神ファンの某先生に祝福してあげたい気分でいたのですが、七点差が付いたのに、彼は何となく浮かない表情で、声を掛けにくい風情でした。ところが、授業が終わって帰ってきたら、阪神は八対七で逆転されていました。阪神ファンの先生は授業がないので試合の一部始終をずっと見ていたのですが、悲惨な展開にショックを受けているはずなのに、むしろほっとしている趣で、試合の意外な成り行きにも増して彼の表情の方がなお意外に感じたものです。

結局、その試合は十対十で引き分けに終わりました。日没ノーゲームだったと思います。その後、まだ数試合残っていて、うち一つ勝てば阪神が優勝できたのですが、そうなりませんでした。その後もこうして永遠の優勝候補であり続けたのかというと、さすがにそうはならず、何回か惜しいところで優勝を逃した後、昭和六十年についに宿願を果たしたことはご記憶の方もいらっしゃると思います。四十八年の時の先生とはまた違う、別の「トラキチ」教員の様子をたまたま地方の研修先の宿所で見ていた学生から聞いたところでは、その人も何やら戸惑いの表情を浮かべていて、喜びをともにしてあげたい学生たちが、どう声を掛けていいのか、やや迷ったそうです。その夜、大阪の道頓堀で、阪神ファンの若者たちが水に飛び込んだという有名なトピックがありましたが、彼らも、嬉しくはあるが、尋常な形で喜びを表現できない、というより、喜びを喜びとして自覚しにくい不思議な屈折した心情を持て余していたのだと思います。これを今日のテーマにどう繋げるか、またあらためて考えたいと述べて、また寅次郎の話題に戻ります。「トラ」について語っている内に、私自身も少しクレージーになって時間配分がおかしくなったらしく、もう時間がほとんどなくなってしまいました。まことに申し訳ありません。

そこで、かなり強引に引き合いに出させていただいた阪神に関することをもう一つ取り上げてしめくくりにしたいと思います。

阪神球団の別名がなぜタイガースかという問題があります。通説によると、大阪と姉妹都市の協定を結んだデトロイトがタイガースというチームを持っているからだということになっていますけども、果たしてそうなのか。実はひそかに疑っております。それは逆であって、共にタイガースを持っているから、デトロイトと大阪が姉妹都市になったとい

う異説もあるようで、私はこちらに賛成したいと思ってきました。仮にこれが正しいとすれば、では命名の由来は何だろうということになります。色々説があるようですが、私としては、大阪の人々に古来篤く信仰されている生駒の聖天とか、信貴山などで、虎が神聖視されていること、その背景あるいは基盤に、上代、朝鮮からのいわゆる渡来人が伝えてきた文化が存在していることに関連付けたい気持ちです。そして、それがまた、「男はつらいよ」と関係がありげなのですね。

車寅次郎に詳しい方々の間で、彼について、実は韓国人なのではないかという説が意外に支持されている模様で、しかも、山田監督ご自身がそれを否定されず、むしろ意識しているらしい。切通理作さんの名著『山田洋次の世界』（ちくま新書）に出て来る挿話ですが、永六輔さんが「寅さんって朝鮮人だろ？」と、かなり決めつけた質問を発した時、監督は「僕は意識していた」と答えたそうです。その意識の具体的な内容や、意識した結果、何をどうしたかということまでは、私は存じていないのですが、山田さんには、戦中戦後の体験の中で、中国、韓国との懐かしいいろいろな記憶や結びつきがあって、それを映画の中に活かしてみたいというようなお気持ちがあったのだと想像しています。それに気付いた博学で敏感なあの人この人が、おりおり韓国人説を立てているのでしょう。まるで、それに応えるかのように、「男はつらいよ」は四十八作の最後に非常に印象的な場面が出てきます。その映像を最後に見て頂いて終わりにしたいと思います。「男はつらいよ」の最後の場面。平成七年の作品、その年の正月に例の阪神淡路大震災が発生しました。壊滅的な打撃を受けた震災地の中から復興への力強い動きを見せた在日の人々を、万感を込めて見て彼らに連帯していく寅さんを見て下さい。

（「男はつらいよ」第四十八作の最後の場面鑑賞）

テレビドラマの最初に新幹線が出てきましたよね。新幹線が開通してまもなく二、三年後だと思います。高度成長期の非常にホットなトピックをドラマの頭に置いて、それにあたかも対照的に響きあうかのように、その二十七年後のこれまたホットな風景を最後に、寅さんを巡る歴史はひとまず幕を閉じました。今日は、その歴史の前提になったと思える「トラ」関係の、記憶に残るあれこれを、思い出すままに取り上げてみました。ご清聴に感謝いたします。

（みき　すみと・本学国際人文学部客員教授）